

令和5年度(第54回)中国地区老人福祉施設研修大会〔分科会別〕発表事例一覧

第1分科会C(特別養護老人ホーム等) テーマ:「人材確保・育成・定着」

会場:岡山コンベンションセンター 3階 コンベンションホール②

助言者:社会福祉法人愛誠会 特別養護老人ホーム唐松荘 施設長/岡山県認知症介護実践研修指導者 池田 和泉 氏

座長:鳥取県老人福祉施設協議会 研修委員長 野村 智恵美 氏

幹事:岡山県老人福祉施設協議会 研修委員 小橋 孝司 氏

	No.	テーマ ～サブタイトル～	県	施設 種別	施設・事業所名	発表者職名	発表者氏名
午前	1	その人のニーズを大切にチームケア ～きっかけはLIFE(科学的介護情報システム)～	広島市	特養	なごみの郷	施設ケアマネジャー 生活相談員	廣木 佑介 中村 静香
	2	とろみ粘度の安定化を目指して ～安心安全な嚥下調整食の提供のために～	広島県	特養	さいきせせらぎ園	管理栄養士	椿 奈々実
	3	職員1人1人の力をつける ～職員育成から始める～	山口県	特養	日の山園	ユニットリーダー	野村 雅弘
	4	研修後、業務へ活かす仕組みづくり ～やりっぱなしからの脱却～	広島市	グループ ホーム	なごみの郷亀山	介護職員	三宅 克
	5	顔の見える厨房へ ～厨房職員も利用者とともに～	鳥根県	特養	もくもく苑	管理栄養士	福代 美穂子
	6	未経験でも期待される職員になるために	広島県	特養	風の街みやびら	介護福祉士	安田 怜香
	7	オムツ交換回数削減でゆとりの創出 ～やりたいケアからできるケアへ～	広島市	特養	介護老人福祉施設サンヒルズ広島	介護福祉士 介護福祉士	大野 佳人 宇野 雄二
午後	8	ICTで繋がる安心 ～マインドセットシフトへの気付き～	岡山県	特養	あすなろ園	統括主任 介護福祉士	竹内 裕貴
	9	特別養護老人ホームにおける障がい者雇用の効果 ～ゆったり、楽しく、いっしょに働く～	広島市	特養	悠悠タウン江波	主任相談支援専門員 介護福祉士	岡田 有史
	10	日本列島 食紀行 ～かるが厨房発～	広島県	特養	かるが	管理栄養士	武藤 愛美
	11	外国人材の育成と共生社会を目指して ～インドネシアからの介護技能実習生を迎えて～	鳥根県	特養	くざの里	介護福祉士	山品 壮輝
	12	排泄ケアから考える業務改善と質の向上 ～パッドを見直し一石三鳥～	広島市	特養	石内慈光園	ケアワーカー ケアワーカー	山本 晃弘 栗栖 操
	13	なぜ「人が足りない」のか? ～ケアの質から考える人材確保～	山口県	特養	美川苑	施設長兼法人理事	田中 大智

第2分科会(養護老人ホーム・軽費老人ホーム・ケアハウス) テーマ:「養護老人ホーム」「軽費老人ホーム・ケアハウス」

会場:岡山コンベンションセンター 1階 イベントホール①

助言者:ノートルダム清心女子大学 人間生活学部 准教授 濱崎 絵梨 氏

座長:山口県老人福祉施設協議会 研修委員長 磯本 智恵 氏

幹事:岡山県老人福祉施設協議会 研修委員 松本 好章 氏

	No.	テーマ ～サブタイトル～	県	施設 種別	施設・事業所名	発表者職名	発表者氏名
午前	1	タブレットを活用してみよう! ～情報提供や記録の見直しについて～	山口県	軽費・ケア	ケアハウス三丘	栄養士	林 彩華
	2	住み替え ZERO を目指して～特定化チャレンジ ～ケアハウス入居者の特定施設入所者生活介護移行に向けて～	広島県	軽費・ケア	特定施設入所者生活介護 サンライズ港町	介護主任	守本 加奈美
	3	「またケアハウスで生活したい」 ～Y様の思いを実現させるために～	岡山県	軽費・ケア	ケアハウスたもん荘	生活相談員	松上 歩
	4	健康で文化的な暮らしを送るために ～高齢者にとっての健康と文化とは?～	山口県	軽費・ケア	ケアハウスわかば	生活相談員主任	内田 一成
	5	地域貢献! 支え合い! ～地域とつながる買い物ツアー～	鳥根県	軽費・ケア	ケアハウス古志原ヒルズ	生活相談員	伊達 隆春
	6	その人らしい暮らしに向けて ～気持ちや声から見えてきたもの～	鳥根県	養護	ミレ青山	生活相談員 介護職員	樋口 直子 高浜 里奈
	7	食事のプレゼント ～入居者様の思いを叶えるために～	山口県	養護	山口市阿東老人ホーム	栄養士	田中 啓子
午後	8	精神障がい者への生活支援を通して ～根拠に基づき個々に合わせた介護ができるために～	鳥取県	養護	鳥取市なごみ苑	介護福祉士	苗 紅義
	9	誤嚥性肺炎ゼロを目指して ～ケアの標準化で実現～	鳥根県	養護	養護(官)老人ホームかんなび園	生活支援課主任	原田 誠
	10	コロナ中でもキレイになって ～わくわく化粧でどうなるか～	山口県	養護	寿楽苑	支援員	中村 保典
	11	モチベーション向上に向けて ～育成リーダーの取り組み～	鳥根県	養護	宇寿荘	相談員	加藤 明夫
	12	コロナはイヤだ!!でも、楽しく過ごしたい ～園内活動・クラブ活動の見直し～	広島市	養護	上安慈光園	介護職員 副主任・介護職員	石田 文子 勝田 満

※抄録資料に記載の内容(発表者等)が変更になっている場合がございます

2-1

演 タブレットを活用してみよう！

副 情報提供や記録の見直しについて

ICT

情報提供

記録の効率化

山口県周南市

軽費老人ホーム ケアハウス三丘

栄養士・林 はやし あやか 彩華

生活相談員 西田 恵子

mitsuo75@kvision.ne.jp

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

当施設は山口県周南市の東部にある三丘温泉に立地している。平成14年4月に定員50名のケアハウス（一般型）を開設。現在、男性入居者と女性入居者の割合は3：7で平均年齢は約86歳。約8割の入居者が介護保険（外部サービス）を利用して生活されている。

<取り組み課題>

* 近年、体調不良による救急搬送や受診の初期対応が増えてきている。この3年間は新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、医療機関に受診の相談をしても、たらい回しにされることが多く、受け入れていただく医療機関も本人のかかりつけの医療機関ではないケースが多かった。

* 救急搬送時に活用する個人ファイルの資料の整理が不十分であった。

* 救急搬送後や職員の判断による受診の初期対応後は、「病院搬送・付添記録」を作成しているが、対応した職員が施設に帰所してから記録を作成する為、時間を要していた。

<具体的な取り組み>

* 個人ファイルの情報を整理し、電子化して保存・活用するようにした。

* 救急搬送や受診の初期対応に同行する職員は、タブレットを持参し、医療機関に対して必要な情報を提供するようにした。

* 「病院搬送・付添記録」は、医療機関に同行した職員がタブレットに直接入力して作成することができる。また、事務所にいる職員もPCから状況を入力することが可能で、両方で記録作成ができるようにした。

* 医療機関に持参するタブレットは、PCが苦手な職員でも簡単に操作できるようマニュアルを作成し職員で訓練を実施。

<活動の成果と評価>

* 個人ファイルに掲載する情報を整理し、電子化したことで医療機関への情報提供がしやすくなった。

* 「病院搬送・付添記録」が、タブレットに直接入力して作成できるため、医療機関に同行した職員が院内で作成することができ従来と比べて記録業務の効率化に繋がった。

* タブレットは救急搬送に限らず、日常の外出行事でも活用でき、効率化・省力化に繋がった。
(従来は、外出行事に参加する入居者全員の個人ファイルを持参して外出していた)

<今後の課題>

* 情報管理の徹底。

* タブレット活用の促進。

2-2

住み替え ZERO を目指して～特定化チャレンジ

ケアハウス入居者の特定施設入所者生活介護移行に向けて

住み替えの不安

特定化

収益の安定

広島県三原市

とくていしせつにゆうしよしやせいかつかいご みなとまち
特定施設入所者生活介護カライズ 港町

介護主任 もりもと 守本 かなみ 加奈美

介護係長 かど 加戸 やすお 泰生

minatomachi@snrs.or.jp

施設（事業所）
 またはサービスの
 概要

ケアハウスカライズ 港町は駅・通院・買い物等利便性の良い立地にある6階建ての複合施設。（特定施設18室【介護保険施設】、ケアハウス38室、デイサービス定員30人）ケアハウスでは生活が困難になった利用者の一部は他施設へ住み替えが必要となる。

I.<取り組み課題>

- ・認知症や身体状況の悪化により、在宅サービスだけでは対応が困難になったケアハウスの利用者は、住み替えを考えるようになる。なじみの施設からの住み替えを考えるケアハウス利用者の負担と不安を軽減したい。
- ・併設の特定施設入所者生活介護事業所の定員枠が18人と少なく、他の施設に住み替えをする利用者も多かった。特定施設入所者生活介護事業所の定員枠を増やし（特定化）、なじみの施設で最期まで生活できることを目標とする。
- ・利用者を取り巻く環境の変化により、以前より空室期間が目立つようになった。空室期間を減少し安定した経営を図りたい。
- ・特定化に際し、階が分かれることや定員増加など、様々な課題があるが、職員体制の変更、業務改善、環境の改善等を行い、ケアハウスから特定化への効率的な一部移行を推進する。

II.<具体的な取り組み>

- ・職員間で「住み慣れたケアハウスで、できるだけ長く生活できる」を共通目標にし、ケアハウスから特定施設入所者生活介護事業所へのスムーズな移行を推進した。
- ・「特定化チーム」を結成し、業務の効率化、利用者・家族への説明、施設運営等、定期的に会議を開催し検討した。
- ・既存の階以外にヘルパー室を増設して職員を配置することにより、定員増による密状態の解消と個別対応を行った。
- ・日勤帯の業務を見直し、業務が集中する時間に職員体制を厚くし効率的なケアを実施した。

III.<活動の成果と評価>

- ・定員枠が広がって希望者が特定施設入所者生活介護事業所に移りやすくなった。

定員	ケアハウス	特定施設入所者生活介護
H29年（特定化前）	38人	18人
R2年	29人	27人

- ・特定化の人数の増加と連動して介護報酬が増加し収益が増えた。

1人当たりのサービス活動収益	
H29年（特定化前）	6,895円
R2年	7,944円

- ・ケアハウス利用者への特定化についてのアンケート結果では、21名中15名が「安心感」を感じておられ、21名中19名が「特定施設入所者生活介護事業所に移行したい」との回答を頂いた。目標である「ケアハウス利用者の負担と不安の軽減」に一歩近づいている。

IV.<今後の課題>

- ・現在も特定施設入所者生活介護事業所への移行希望に対応しきれていないため、行政と協議の上、全館特定化を目指していく。
- ・今後、特定施設入所者生活介護事業所利用者の増加に伴い、夜勤職員、看護職員の増員など職員体制の増加が必要となる。
- ・AIカメラを用いた入居者の予兆や異常を検知するシステムを導入した。今後もICTを活用し介護の質の向上、職員の負担軽減を推進する。

2-3

「またケアハウスで生活したい」

Y様の思いを実現させるために

自立支援

多職種連携

目標設定

岡山県岡山市東区瀬戸町

施設名 ^{ふりがな} ケアハウス たもん荘

生活相談員 ^{まつうえ} 松上 ^{あゆみ} 歩

施設長 額田 歳也

E-Mail tamon-care@tensetsukai.or.jp FAX (086) 953-0012

施設（事業所）
またはサービスの
概要 10p

施設開設：平成14年9月 事業主体：社会福祉法人 天摂会
入居者19名（男性4名 女性15名） 平均年齢86.7歳
要介護3：2名 要介護2：3名 要介護1：1名 要支援1、2：8名 非該当：5名

I. <取り組み課題>

・たもん荘は自立型の施設なので、転倒や入院等でADLが落ちて介助が多く必要になると、生活が成り立たなくなる。
・たとえADLが落ちて、入居者が望まれるのであれば、ケアハウスに少しでも長く、穏やかに過ごして頂きたいと思い、「自立支援」の取り組みを模索し、実施した。

II. <具体的な取り組み>

事例：難聴はあるが身の回りの事はご自身でされていた入居者のY様。令和4年5月に胆嚢炎で1か月入院される。入院中に食事以外は介護が必要な状態になり、要介護2の介護認定を受ける。ケアハウスに戻れる状態ではなかったため、併設特養のショートステイを利用。能力的には起立や歩行は出来るはずだが、退院してからも自発的に何かしようということは無状態、介助を受けられていた。
・事例より、Y様の今後をどうするか決めるために、まず本人とご家族の意向を確認。「ケアハウスに戻りたい」という目標を共有し、Y様がどこまでできればケアハウスに戻れるかの基準を明確にした。
・ショートステイ職員向けに、Y様の排泄動作時には介助をせず、自分で出来ているかどうかの観察をお願いした。
・下着をオシメ⇒紙パンツに変更し、Y様ご自身で交換するようにお伝えした。
・Y様がどの程度歩行できるのか確認し、OTに歩行訓練を依頼した。
・ケアハウス居室とIADLの環境整備をケアマネージャーの力を借りながら行った。（入浴、洗濯、掃除）
・環境整備後、ケアハウスにお試し宿泊した。

III. <活動の成果と評価>

・Y様と一緒にケアハウスの居室や食堂を見に行き、「ここに帰りたいですか？」と尋ね、本人から「帰

りたい」という意思を確認出来た。

・ケアハウスに戻れる基準①排泄動作が自力で出来る②安全に自力で移動できる、明確にした。
・自力でオシメ交換は出来ないため、紙パンツに変更、夜間用にショートステイ居室にPトイレを設置した。結果、失禁が無かったため、早期に布パンツに戻すことが出来た。
・足の筋力低下のため、シルバーカーを使っての歩行を選択した。
・ケアハウスのお試し宿泊は、転倒や失禁もなく過ごすことが出来た。
・退院してからケアハウスに帰るまでの期間は約1ヶ月であった。
・ケアハウス帰荘後、デイサービス、ヘルパー利用開始。リハビリに意欲的に取り組まれ、洗濯、掃除はヘルパーと一緒に出来ている。
・今までは「ケアハウスで生活できなくなったら特養に行く（一方通行）」ということが共通認識であったが、事例を通して、特養に行ってもケアハウスに戻ってくる事が出来る（往復）という新たな認識を生むことが出来た。
・入居者自身の希望を確認し、目標を多職種で共有・共同してもらうことで目標達成につながった。

IV. <今後の課題>

・ADLが下がらないよう今後もデイでのリハビリは継続。ヘルパー利用時も出来ることはご自身で頂き、ヘルパー利用回数減少を考える。
・入居者のADLが下がってきたと感じたら、直ぐに介助の手を増やすのではなく、なるべくご自身でもらえるように環境整備する。
・職員だけでなく入居者本人にも目標を理解してもらい、「してもらう」のではなく「する」のは入居者ご自身であることを認識してもらう。

2-4

健康で文化的な暮らしを考える

高齢者にとっての「健康と文化」

高齢者と文化

健康維持

コロナ禍

山口県下関市

軽費老人ホーム・ケアハウスわかば

生活相談・内田一成 うちだかずなり

職員一同

wakaba158@jcom.home.ne.jp

FAX 083-248-3738

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

単独型ケアハウス。令和5年8月に開設20年を迎える。入居者定員50人。職員構成施設長1、生活相談員1、介護職員3、管理栄養士1、事務員1はすべて常勤。R4年度の退居者3名。介護認定を受けている者36名。平均年齢88.6歳。

<取り組み課題>

健康で文化的な生活は理想だが、高齢者にとって健康であり続けることは容易では無い。健康を損なうと生活の質（文化）も低下する。

健康を維持し、文化的な生活を維持したい。半面、ケアハウスに入居したなら、少しくらい健康にたまらずいても、その人らしく文化的な暮らしが持続することも大切である。

高齢者にとって「健康と文化」について考えたい。

<具体的な取り組み>

- ・新規入居のアセスメント調査を行い、過去の暮らし（ポジティブな話題）を聞き取る。
- ・入居しても継続できる趣味活動を行う（秋の文化祭への出品）
- ・その人にあった介護サービスの提供
- ・定期的な行事と、四季折々の行事
- ・体調管理として夏場の熱中症対策
- ・遊び心を大事にする

<活動の成果と評価>

- ・入所した頃はふらつきもあって虚弱であった方が、徐々に元気になってほぼ自立になった。
- ・潤いある生活支援を行っている、文化祭出品に向けて作品制作の意欲を醸し出せた。
- ・熱中症対策としてエアコンの管理を行い、熱中症になる方が減った。

<今後の課題>

- ・今後はコロナ対策を行いながらの行事の実施を検討したい。
- ・コロナ禍前は自由な生活がケアハウスの最大のメリットであった。しかしコロナ対策で一気に外出、行事、面会などの制限が強くなり、自由な生活が難しくなった。特に自立度が高い方の不満は強くなった。感染対策が今後も続くことを考えると、自由な生活を取り戻す事が非常に難しい。ケアハウスにとってコロナは大きな痛手である。
- ・コロナ禍において文化的な生活を目指すには、コロナが高い障壁となった。5類に引き下げられたが高齢者施設においてコロナ対策は従来とあまり変わっておらず厳しい。コロナ禍以前のあたり前な生活をいつ、どのような形で取り戻せるのか容易ではない問題である。
- ・自立型施設のために、職員も少なく、支援を行うことには限界がある。健康と文化のある暮らしを持続させるために知恵を絞って支援したい。
- ・子どもの発達段階において「遊び」は大事だが高齢者になると「遊び」は論じられない。（余暇活動になるのか？）しかし、豊かで健康的な暮らしを送る高齢者には「遊び」が絡んでいると考えられる。今後は科学的に高齢者の「遊び」について考えていきたい。

2-5

地域貢献！支え合い！

生活支援

地域ニーズ

施設力の活用

地域と繋がる買物ツアー

島根県松江市

(ケアハウス) ケアハウス古志原ヒルズ こしばら

施設長代理・生活相談員 だてたかはる 伊達隆春

市営古志原住宅自治会長 青山國完

松南第一包括 CSW 青山力・安部貴明

E-mail : Keihi-nakayoshi.1978@white.plala.or.jp FAX:0852-24-9206

施設（事業所）
またはサービスの
概要 10p

平成 23 年に軽費老人ホーム A 型からケアハウスへ転換、定員は 50 名。法人は、高齢者施設、障害者施設、保育園事業を展開しており施設合同で行事を実施し、地域に根差した活動を行っている。

※以下 9p

I. <取り組み課題>

- ・地域貢献するにあたり、施設へ来訪していただくことを主に考えていたところ、松南第一包括支援センターより相談があった。
- ・市営古志原住宅自治会長より、高齢住居者が増えていること、家族構成が以前とは異なってきていることから買物に困っているという相談あり。
- ・同じ古志原地区にある古志原ヒルズへ相談があったことから地域貢献の一環として前向きに取り組んでいくこととなった。

II. <具体的な取り組み>

- ・実施にあたり、関係者が一度集まり実施するにあたり詳細決定する会議を実施する。
- ・古志原ヒルズハイエースを使用するため、運転手以外 9 名が乗ることができるため 9 名を上限として市営古志原住宅自治会長が参加者を募ることとなる。
 - ◆時間、買物の行き先
 - ◆利用料金
 - ◆市営住宅の方への周知方法等
 - ◆送迎車の乗降場所
 - ◆一人で買い物が難しい利用者（サポーター支援）

* 買物ツアー前にはハイエースを洗車し綺麗にしておくことを心掛け、使用していただく方に不快な思いをしないよう配慮する

III. <活動の成果と評価>

- ・令和 3 年 7 月 27 日(火)を第 1 回として開催することとなり、希望者を募ったところ 7 名の利用希望があったと報告あり。サポーター 1 名（同じ市営住宅在住の方）、市営古志原住宅自治会長 1 名、松南第一包括 3 名で実施することとなる。
- ・第 1.2 回は「ひまり大庭店」で買物ツアーを実施することとなった。第 3 回は利用された方の声を反映し、別の店で実施したが、実施後元に戻して欲しいとの声が挙がり第 4 回も「ひまり大庭店」で実施することとなった。挙がった声としては、陳列棚の間が広く歩きやすい、スタッフの方に声を掛けた時に明るく対応してもらえたということがあった。
- ・買物へ行かれる前は手荷物等なく身軽であったが、1 万円を超えるような買物をされる方もおられ大量の荷物となることがあった。サポーター含め支援できる方が複数名おられたこともあり、下車後は各戸玄関まで荷物を運ぶサービスも好評の一つであった。
- ・実施回数を重ねることで利用される方との距離も縮まり、当施設のことを知っていただく契機にも繋がった。また、地域ニーズを探る契機にも繋がることが出来そうであった。
- ・令和 3 年 11 月を最後に開催できていなかったが、令和 5 年 5 月より再開している。7 月は参加される方の希望（昼食、夕食、朝食を購入したい）で午前中に開催することになった。

IV. <今後の課題>

- ・現在は市営古志原住宅の方を限定に実施している買物ツアーであるが、地域ニーズを把握しながら今後の展開も検討していく必要があると思われる。

2-6

その人らしい暮らしに向けて

生きがい

特性の理解と共有

特性に沿った支援

気持ちや声から見えてきたもの

島根県江津市

養護老人ホーム あおやま ミレ青山

発表者 生活相談員 ひぐち なおこ 樋口 直子
 介護職員 たかはま りな 高浜 里奈

mille-a@cyber.ocn.ne.jp

ミレ青山(養護老人ホーム)サービスの概要

江津市西部に位置し、小高い丘から日本海も一望できる環境にあります。平成 12 年 7 月運営を開始、平成 18 年 10 月に外部サービス利用型特定施設入居者生活介護の指定を受け、平成 28 年 4 月 1 日より一般型特定施設に移行。定員 50 名。

I. <取り組み課題>

現在、当施設では精神疾患や精神発達遅滞(知的障害)等を有する方が入所者の 3 割程度を占めている。

精神疾患等を有する方の中には、対人トラブルや生活リズムの乱れ、薬物療法による身体影響等を機に、悪循環に陥る傾向があり、安定した生活を送るには、周囲の理解や生活基盤を整えることが不可欠である。養護老人ホームが果たすべき役割に加え、障害特性の理解や障害特性に沿った支援の充実を目指し、高齢障害者の受け皿としてその社会ニーズに応じていく必要がある。

II. <具体的な取り組み>

(事例 1) S 様 67 歳 女性 (介護度: 要支援 2)

■寝たきり度: A1 ■認知症度: II b
 ■現病: 高次脳機能障害(精神保健福祉手帳 2 級、H30. IQ67、HDS-R26 点)、慢性腎不全、肝炎など

■入所に至るまでの経過

高次脳機能障害を発症して以降、不穏状態による医療保護入院や転院を繰り返す。症状安定後は社会的入院となっており、R4 年 2 月にミレ青山入所。

生活課題

生活環境の変化から、精神的に不安定になることが懸念されるため、生活基盤を整えるなど精神面の安定に向けた支援をしていく必要がある。

入所時の具体的な取り組み

- 1) 新しい環境で生活リズムを作る(日課や役割等)。
- 2) 職員や入所者と馴染みの関係を作る。
- 3) 生活上の困り事などの解決しづらい困難を相談・助言を通してサポートする。

生活上の変化から見えてきた障がい特性

- ①膝痛から日課への支障が出現。強いこだわりがあり、職員からの助言が受入れられない。
- ②担当職員が変わる。気持ちの切替えができず、依存性が出現。思うようにならないイライラから感情コ

ントロールができなくなり、衝動的行動に至る。

③対人トラブルや他者影響から感情コントロールができなくなり、衝動的行動をとってしまい、気持ち落ち込みがちになる。

④職員と一緒に交わした約束を守れず、忘れてしまったりする。

⇒本人が置かれている状況として、ストレスを抱える場面が増えていった。同時に障害特性とストレスに対する脆弱性が顕在化。

障害特性等を考慮した入所後の具体的な取り組み

- ①『孤独感の解消』に繋がる支援
- ②『生きがい・楽しみ』に繋がる支援
- ③記憶障害: 視覚的に記憶が補えるよう支援
- ④精神的なサポート: 家族への面会協力依頼

: 職員や入所者との日常的な交流等

⑤依存性: 状況を説明して時には断る、時間を限って聴く、他職員との関係形成も促すなど関わり方を修正

⑥衝動的行動: 障害特性の理解と共有、協力体制の整備や環境調整、自己対処法と一緒に身につける等の支援

⑦医療連携: 囑託医への相談

III. <活動の成果と評価>

・不満・依存・孤独感・感情の起伏・衝動的行動が少なくなり、生活に対しての満足やプラス言葉、受け流せている発言が増え、生活リズムも定着してきている。

・生活する中で起こっていく困難やストレスに対し、本人の気持ちや声に耳を傾け、意向や特性を考慮し解決策と一緒に考えていくことで、「その人らしさ」が大切にされ、生きがいある暮らしに近づいてきている。

IV. <今後の課題>

介護の重度化に加え、精神疾患や精神発達遅滞等を有する方の増加と、ソフト面・ハード面のキャパシティのバランスも見つつ、多様なニーズに応じていきたい。そのためには、迅速な支援展開に繋げるための専門性とチーム力を高めていくことが必要である。

2-7

食事のプレゼント

入居者様の思いを叶えるために

質の高い支援

入居者様との距離感

職員のレベルアップ

山口県 山口市

養護老人ホーム やまぐちしあとうろうじんほーむ
山口市阿東老人ホーム

栄養士 たなか 田中 けいこ 啓子

E-mail Address anzu-atr@c-able.ne.jp Fax 番号 083-954-0151

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

定員 50 名。普通食 22 食、個別食 25 食（制限食 12 名）食行事：季節の行事食(20 回程度)、あんずのおもてなし、出店屋村ちゃん、うまいもん会。個別ケアの推進をホーム内で目標に掲げ、希望の一品を食事のプレゼントとして提供。

<取り組み課題>

- ・自分 1 人のための特別感、考えてもらえる食事作りの実現と、調理職員と入居者様の関りを増やす
- ・誕生日当日に担当調理職員 1 名が対象者の好きな料理を 1 品プレゼントする
- ・コロナの影響で食行事が縮小となり、入居者様と調理職員の関わりが少なくなった
- ・聞き取りが難しい、望んでおられる気持ちを引き出せていないのではないか、調理職員からの悩みを調査する
- ・当初からいる調理職員が 1 名となり、情報を共有し、伝統を伝えていくためにも改めて食事のプレゼントについて見直すこととなる

<具体的な取り組み>

開始日：平成 17 年 7 月
 対象者：入居者様全員 50 名
 形式：通常の献立に 1 品加える
 人員構成：栄養士 1 名 主任調理員 1 名
 調理員 6 名 パート調理員 1 名
 新規職員は採用後 6 ヶ月後程度から担当する
 提供時間：昼食時(昼食が行事食の場合夕食時)
 手順：①希望メニューの聞き取り
 ②食材の注文
 ③生花と誕生日カードの作成
 ④器選び
 ⑤食事作り
 ⑥感想の聞き取り
 ⑦報告書
 費用：平均 500 円程度
 人気メニュー：散らし寿司、おはぎ、刺身等

<活動の成果と評価>

- ・入居者様に食事のプレゼントに対するアンケートを実施した結果、概ね 8 割の方が良いと答えた
- ・調理職員へのアンケートは、良い点、悪い点、成功体験、失敗体験、プレッシャー、聞き取り方法、カード作りのポイントについての意見を取りまとめることができた
- ・アンケートの結果を踏まえ、調理勉強会にて当初の目的や考え方等を共有することができた
- ・マニュアル作成
- ・積極的に学ぶ姿勢
- ・棟担当を配置

<今後の課題>

- ・良いと回答されなかった入居者様の気持ちを引き出すコミュニケーション能力の向上
- ・最高の 1 品(入居者様の好奇心)を生み出すよう他職種連携
- ・制限がある方へ食べる楽しみを持続する選択肢の増
- ・報告書の質の向上
- ・担当調理職員の負担軽減

誕生日カード集

- ・季節感を重視、その方に合った色彩を意識

食事のプレゼント集

- ・個人に合った食形態を基本とした、おいしかった、また食べたいと言っていた食事作り

2-8

精神障がい者への生活支援を通して

～根拠に基づき個々に合わせた介護ができるために～

精神障がい

他職種連携

介護過程の実践

鳥取県 鳥取市

養護老人ホーム 鳥取市なごみ苑

介護福祉士 苗 紅義
(チームリーダー)

主任介護福祉士 大島 鮎

E-mail Address : nagomi@tottorifukushikai.jp

Fax 番号 : 0857-53-6554

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

養護老人ホーム (定員 90 名)
外部サービス利用型特定施設入居者生活介護事業
生活管理指導短期宿泊事業 (ショートステイ 6 名)

I. <取り組み課題>

当施設では精神障がい者の割合が年々増加している現状がある。R2 年度に実施した職員への聞き取り調査では、意思疎通の難しさや介護拒否等、精神障がい者への対応に苦慮している職員が多いことが明らかになり、職員のスキルアップと、利用者個々に合わせたケアを目指し、取り組みを始めた。

【テーマ】 R4 年度

精神障がいに関わる職員の悩み-疑問-不安等を踏まえ、「精神障がい者への生活支援を通して～根拠に基づき個々に合わせた介護ができるために～」とした。

【目的】

他職種との連携を強化し、介護過程を実践することで効果を明らかにする。

II. <具体的な取り組み>

1、職員のスキルアップ、意識向上：

- ① チームメンバーが講師役となり、精神障がいに関する勉強会を毎月実施。
- ② 職員の精神障がいに関する理解度の評価指標として『精神障がいチェック表』を作成し、定期的に自己/他者チェックを実施し、結果を分析。

2、介護過程の実践：

- ① 対象者を選定し、『障害特性チェックシート』、『動作手順シート』を活用し、アセスメントを実施。主治医とアセスメント内容のすり合わせを実施。
- ② 他職種連携のもと、介護過程を実践し、毎月モニタリング、アプローチ修正を繰り返す。
- ③ 個別対応マニュアル(フローチャート)を作成し、職員間で共有。

III. <活動の成果と評価>

1、職員のスキルアップ、意識向上：

- ① 精神障がいに関する勉強会では、参加者、発表者双方に学びや気づきがあった。
(参加者) …「誰でもなりえる病気と分かり、身近な病気を感じた。」等。
(発表者) …「精神障がいによる行動だけでなく、その背景も考えながら関わるようになった。」等。
- ② 精神障がい理解度自己チェック

平均点： 6月 18点 ⇒ 10月 43点

2、介護過程の実践：

- ① 事例 T 様 (障害特性アセスメント：統合失調症)
目標：① 普通トイレの使用 ⇒ ポータブルと普通トイレも併用となる。
② 暴言、暴力の緩和 ⇒ 薬調整、対象者と距離をとる等の環境改善で効果あり。
・主治医とのリモート会議で、意見/助言を受ける。
- ② 利用者の様子を整理した情報共有シートを受診前に医師にメールすることで具体的な指示がある。
・排泄介助の手順統一、環境整備、職員の根気強い関わりで、一連の排泄動作が可能との見解や、本人の精神症状に合った薬に処方変更など。
・主治医や PT/OT、看護師の見解や日々の変化が根拠となり、関わる職員の自信に繋がった。
- ③ 個別のアセスメントシートを数値評価できるよう見直しを行い、期毎の評価が明確になった。

評価点： 5月 35点 ⇒ 9月 45点

3、テーマ/目的に対する成果と評価：

勉強会/理解度チェック/主治医、他職種連携/個別シート等の実践により、一定の成果を達成できた。

IV. <今後の課題>

1. 他ご利用者の受診時にも応用して行く
2. 知識を現場で活かせる仕組み作り
3. 関わり方をチェックし合える仕組み作り

2-9

誤嚥性肺炎ゼロを目指して

ケアの標準化で実現

誤嚥性肺炎予防

再アセスメント

再教育

島根県出雲市

養護（盲）老人ホーム ^{えん} かなび園

生活支援課主任 ^{はらだ} 原田 ^{まこと} 誠

介護支援専門員 工藤 哲

FAX : 0853-72-4030

施設（事業所）
またはサービスの
概要 10p

かなび園は山陰で唯一の盲養護老人ホームである。事業内容としては盲養護老人ホームに加え、短期入所事業、特定施設入居者生活介護を展開し現在、入所者は50名定員である。

I. <取り組み課題>

研究期間：令和3年5月～11月

誤嚥性肺炎での入院者が増加傾向にあり入退院を繰り返す事が多かった。

この要因として、職員の食事介助経験年数がまばらであり、新人職員に対して指導マニュアルはあるもののその日の指導担当者が各々の経験と知識、考え方、話し方で指導を行っており指導内容がまちまちでケアの統一性に欠けているのではないかと考えられた。またケアプランは存在するも食事面でのアセスメントの弱さからその方に最適な食事介助が提供出来ていないのではないかと疑問視し今回取り組みを行った。

II. <具体的な取り組み内容>

介護職員による食事介助を一斉に中止する。

その間に医療職を中心として、①利用者の再アセスメント、②介護職員への再教育を行った。

【再アセスメント内容】

- ①食事の形態
- ②トロミの強度
- ③スプーンの形状
- ④ポジショニング
- ⑤離床時間の検討
- ⑥食事中止の基準
- ⑦口腔内環境のチェック方法

【再教育内容】

- ①書面指導
- ②口頭指導
- ③現場での実技指導

【医療職の勉強】

- ・医療職間での話し合い
- ・病院の医師や言語聴覚士への相談とアドバイス

III. <取り組み内容の結果と評価>

【再アセスメント結果】

- ①個々に合った食事形態の見直し
- ②トロミの強度の調整
- ③一口サイズのスプーンを4種類準備
- ④ポジショニングでは食道が真っ直ぐになる様に修正し、自力摂取の方へはテーブルの高さ調整
- ⑤離床時間の見直し
- ⑥中止の基準の明確化
- ⑦食事前の口腔内の乾燥チェックと対応、食後の口腔ケアの徹底
- ⑧食堂のテーブルの配置の変更

【結果】

・要介助者の誤嚥性肺炎の発症は令5年現在まで罹患者はゼロである。

【職員向けアンケート結果】

- ・取り組み前⇒全量摂取、時間内に終わる事を意識した職員主体のケアとなっていた。
- ・取り組み後⇒口腔衛生や食事前の疲労の回避の大切さ等に新たな気づきが生まれ意図的に関わる様になった。

IV. <おわりに>

ケアの標準化を図る為にマニュアルの更新を行った。また一定のケアが出来る為には多職種連携が重要となる。標準化の意義を認識しながら様々な介護技術においても漫然と行うのではなくエビデンスに基づいたサービスがどの職員も統一したケアが提供出来る様にしていく必要がある。

V. <参考資料など>

松江市歯科医師会 誤嚥性肺炎マニュアル
島根県老人福祉施設協議会主催研修 要介護者の誤嚥性肺炎予防～誤嚥性肺炎の予防とケア～

2-10

コロナ中でもキレイになって

～わくわく化粧でどうなるか～

化粧療法

顔ツボ

生きがい

養護老人ホーム 寿楽苑

山口県・大島郡

生活相談員 ^{うえだ} 上田まゆみ

支援員 ^{なかむら} 中村 ^{やすのり} 保典

Fax : (0820) 77-2007

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

大島郡周防大島町にある定員 50 名の養護老人ホームです。特別養護老人ホームオレンジ苑・居宅支援事業所も併設されている。それぞれの生活意欲を失わないよう環境作りや援助に努めている。

〈取り組み課題〉

以前は、家族との外出・面会や買い物等の外出行事がありましたが、ここ 3 年は、新型コロナウイルス感染対策の制限により外出する機会がほとんどなくなりました。外出制限の為、身だしなみにあまり関心を持っていない状況が見受けられました。外出制限中でも楽しんで頂けるように化粧を取り入れて、これから外出行事等出来るよう準備をすることで、希望を持ち生きがい対策に力を入れていく。

〈具体的な取り組み〉

令和 4 年 6 月から週 3 回の入浴後に化粧水・乳液を使用してもらう。

毎月の行事には化粧をしておしゃれを楽しんで頂く。

職員と利用者がコミュニケーションをとる中で“肩が凝って”等の声が上がリ、顔のツボを押さえたらいよいよと言うところから顔ツボマッサージも始める。

男性利用者は化粧には興味を持たず、化粧水等も使うことがない為、顔ツボマッサージなら行ってもらえるのではないかと考えた。また、女性利用者も行えるのでインターネット等で調べて、気軽に行えるよう顔ツボ箇所や効果をイラストにして関心が持てるように施設内掲示板に掲示する。顔ツボを押すだけで、肩こり・疲れ目・全身の不快感が改善されるのではないかと、レクレーション前に顔ツボ療法を行うようにする。

〈活動の成果と評価〉

- ・年齢を重ねても身だしなみは必要な様子で、鏡を見る機会が増え利用者同士も会話が増えた。
- ・毎月の誕生日会にも化粧をされて、衣類に気を配り参加するようになり華やかで楽しい時間を過ごされた。
- ・この取り組みの中で、男女問わず認知症の方も職員と一緒に顔ツボマッサージに参加し、見よう見まねで顔ツボを押さえる様子や笑顔が見られるようになった。

利用者 47 名 男性 8 名 女性 39 名
化粧 5 名 顔ツボ 30 名 不参加 12 名

・不参加の方は、化粧・顔ツボに関心がなく普段からレクリエーション等にも参加されていない。

〈今後の課題〉

- ・化粧療法や顔ツボ療法を続けることで、利用者生きがいを持ってもらいたい。
- ・家族との外出も出来るようになれば、おしゃれをして出かけて欲しい。
- ・コロナウイルスを気にせず以前のような生活が送れるよう支援していきたい。
- ・今回参加していない利用者にも声をかけて参加を呼びかけていきたい。
- ・入浴後の化粧水・乳液も続け、顔ツボも個別に出来るよう呼びかけていきたい。

2-11

モチベーション向上に向けて

～育成リーダーの取り組み～

いいねカード

OJT

様々な研修

島根県 雲南市

養護老人ホーム 宇寿荘

相談員 加藤 明夫

機能訓練指導員 恩田 力

kamo-ujusou@samba.ocn.ne.jp

施設（事業所）
またはサービスの
概要

1959年6月より事業開始。現在定員80名。利用者の年齢層65～103歳。平均年齢85.8歳。男性82.8歳、女性88歳。要介護者55名。平均介護度2.16。

I. <取り組み課題>

◎2015年以前の職場環境

- ・業務中の愚痴が多い
- ・言葉遣いがきつく接遇レベルが低い
- ・知識や技術が古い
- ・全体的なモチベーション低下あり

II. <具体的な取り組み>

◎育成強化の取り組み

- ①新人・異動職員オリエンテーション（2017～）
- ・会社の概要、介護保険、様々な技法など13項目
 - ・研修後復命書の提出、面談の実施

◎新人・異動職員のOJT研修（2017～）

- ・1対1での指導。1週間ごとに面談実施。業務達成度やケアの方向性の確認、すり合わせ実施。
- ・概ね3ヶ月実施。最終評価シートにて最終面談。

◎いいねカードの取り組み（2015年～）

- ・職員のいいねと思った内容を職員、利用者様、利用者の家族様が記入、投票を行う。
- ・年間得票数1位職員にトロフィーと賞金あり。

◎各研修の実施（2018年～強化）

- ・法人研修～救急法、感染対策、ハラスメントなど。
- ・個別研修～職場改革、独自の認知症初任者研修。
- ・全体研修～口腔ケア、認知症、レクリエーション。

◎全職員面談（2020年～強化）

- ・施設長、主任相談員、主任支援員、育成リーダーによる面談。傾聴やケアの方向性の確認、できている事や挑戦してほしい事を伝える。
- ・心理的安全性の高いチーム作り

III. <活動の成果と評価>

【取り組み①、②、③、④、⑤】

◎モチベーションアップ（資格取得者増加）

- ・2011年から2016年まで資格取得者0名
- 2017年2名、2018年2名、2019年1名、2020年0名、2021年2名、2022年2名と資格取得者が増加。
- ・退職者が過去5年間で1名のみ

【取り組み②、④、⑤】

◎知識、技術の向上（肺炎入院者が減少）

- ・2019年肺炎入院者11名、2020年2名、2021年1名に減少。

【取り組み①、②、③、④、⑤】

◎接遇の向上

- ・利用者生活満足度調査（5段階評価）実施で、2015年いいねカード開始前は3.1、1年後の2016年は3.7にアップ。
- ・職員満足度調査（5段階評価）実施で、2015年は2.8、2016年は3.5、2022年は3.8にアップ。

IV. <今後の課題>

- ・今年度いいねカードの票数が減少傾向にある為再度票数を回復させる為にいいね月間以外での別の案の検討が必要。
- ・職員の技術・技法や知識のバラつきがあり、サービスに差が出ている為、研修などを通じての取り組みが必要であると考えています。

V. <参考資料など>

おはよう21（2021年10月号、2022年4月号）

2-12

コロナはイヤだ!!でも、楽しく過ごしたい

感染予防対応

クラブ活動

活動内容の見直し

園内活動・クラブ活動の見直し

広島県・広島市安佐南区

養護老人ホーム かみやすじこうえん 上安慈光園

ケアワーカー いしだ あやこ 石田 文子

共同研究者 勝田 満

E-Mail:yougo@jikouen.jp

FAX 番号(082)878-8711

施設(事業所)
またはサービスの
概要

社会福祉法人 慈光会(昭和30年) 慈光会理念 「老後に生きがい」
併設事業所 (居宅介護支援事業所、訪問介護、通所介護、認知症型通所介護)
養護老人ホーム 定員 60名

I. <取り組み課題>

令和元年2月より、日本へ新型コロナウイルスの流入があり、養護老人ホーム上安慈光園(以下、当園)でも、感染状況に合わせて、行事や活動の自粛や内容の見直しを行った。基本的な感染予防に合わせ、外出・外食の自粛を、ご利用者にご協力いただいた。

様々な制限の中、安全に実施できると思われる活動を選択して実施することで、以前に比べ活動の種類も量も激減した。

制限のある生活を続ける中で、ご利用者のADLや認知機能の維持・低下の予防をするためにも、早急な対策を必要とする状況となった。

II. <具体的な取り組み>

1. 職員アンケート、ご利用者へ聞き取り調査実施
2. 感染リスクを抑えた園内活動、行事・クラブ活動の検討と実施
3. ご利用者の心身機能に合わせ幅広く参加できる様、クラブ活動を見直し参加者を増やす
4. 各クラブ活動のポスターを作製し周知することで、ご利用者の興味や参加意欲を引き出す

III. <活動の成果と評価>

今回の取り組みを行うことで、【図-1】の通り、行事の中止や再開、町内会行事の不参加などがありました。また、クラブ活動内容をご利用者の状態に合わせて見直すことで、参加できる機会を増やす事ができた。ポスターの掲示も、活動への興味・参加意欲を引き出すことにつながった。感染症対策で業務にゆとりがなく、客観的な評価は難しかったが、活動の機会や内容を増やす事で、全体的なADLの維持や低下の予防ができ、認知機能の低下の抑制につながった印象は持てた。

【図-1】

訪問行事 施設行事 地域行事	外部との交流を中止 開園記念式等を中止 お花見・紅葉ドライブの再開 町内盆踊りの不参加
園内活動	朝のお勤め、ラジオ体操 喫茶店は継続(条件あり)
華クラブ	月1回 → 月2回程度
体操クラブ	講師を招き、 広い会場で間隔を広く
脳トレクラブ	塗り絵、ペン習字、削り絵等
手芸クラブ	編み物 → 物作り
カラオケクラブ	感染予防対策を行い再開

カラオケクラブは、令和5年度より、月2回を目標に再開しました。5月は2回実施、6月は施設都合で中止、7月は2回計画中。毎回15名前後は参加していただいています。

IV. <今後の課題>

以前の生活に近づけるよう、一つ一つ慎重に判断しつつ継続して活動を見直す必要がある。特に、地域との交流やボランティアの受け入れ等はまだまだ再開できていない。「どうすればできるか!」という姿勢で取り組んでいきたい。コロナウイルスは5類に移行したが、病気の性質が大きく変わったわけではなく、高齢者施設ではある当園では、一定の感染対策が必要な状況には変わらない。そのような中でも、ご利用者のADLや認知機能の低下を予防しつつ、QOLを高めることができるよう引き続き取り組みを継続していきたい。